

マレー語母語話者の日本語話体の使い分けに関する 縦断的研究

Jamila Mohd
(ジャミラ・モハマド)

1 はじめに

現在国際社会では、人々は互いの言語や文化を自由に学べる時代になっており、第二言語学習は盛んに行われてきている。学習者は新しい言語挑戦の面白さに触れる一方で、その社会の規範にそった適切な言語使用を身に付けることの難しさに直面する。第二言語学習には、言語能力だけではなく、社会言語能力と社会文化能力が必要となっている(Canale and Swain 1980、Neustupny 1989など)。中でも、日本語学習者が直面しやすい日本語の待遇表現の習得は、単なる文法知識の習得のみではなく、会話相手やその発話が行なわれる場面などの社会言語学的知識を習得できるかどうかと関係する。日本語の待遇表現には、丁寧体と普通体という話体が言語形式に組み込まれており、話体は相手、場面、状況、目的などへの配慮なしに使用できるものではない。しかし、母語に日本語のような話体が存在しない日本語学習者にとっては、このような話体の切り替えが、誰に対して、いつ行なわれるべきかは習得困難な問題である。学習者の母語の持つ文化と対象言語の文化とのせめぎあいの中で、対象言語の社会言語学的ルールの習得はしばしば困難なものとなっている(Hashimoto 1993、Marriott 1995、三井2000など)。一般的に日本語学習者は誰に対しても問題が生じないであろうという教育的配慮からまず丁寧体を教えられる。やがて普通体へと進むが、この2つ目の話体を学習すると、今度はそれ以前には経験しなかった混乱に直面することになる。つまり、丁寧体を、一体誰に対して、いつ使用したらよいのかという判断の即時処理が自動化されず、当惑するのである。いわば、これまでの良好な対人関係を維持することが困難になるといった状況に陥ると考えられる。本稿では、母語に日本語のような2種類の話体の区別が存在しないマレー語母語話者日本語学習者が、「初対面の場面」において日本語の

話体をどう使い分けるかを縦断的に調査する。

2 先行研究

これまで、話体の使い分けの研究には、会話の中で、丁寧体あるいは、普通体のどちらかを一貫して使用することよりも、同一会話内において、意識的・無意識的に話体を変えるスピーチスタイルシフトの観点からの報告が多く(生田・井出 1983、三牧 1993、宇佐美 1995など)、主に言語学や社会言語学などの分野で研究されてきた。スピーチスタイルシフトのコミュニケーション上の機能を特定するため、これらの研究の殆どは、日本語母語話者を対象にした横断的な調査である。

因みに、日本語学習者による話体の使い分けの習得に関する縦断的研究には Hashimoto (1993)、Marriott (1995)、申(2005)がある。Hashimoto (1993)は、録音開始当時16歳のオーストラリア人女子高校生のケーススタディを行った。録音は日本におけるホスト家族との夕飯の場面、ホスト家族と彼らの友人との新年会の場面、カードゲームをする・ビデオを見る場面、ホスト家族の弟とコンピュータゲームをする場面、日本人の先生や初対面の人を相手とする場面、及び、帰国14ヶ月後のインタビューの場面の、計6つの場面において行われた。結果は、被験者が話体に対する気づきがあるにもかかわらず、日本における5つの場面においては、殆ど方言と普通体のみ使用していた。しかし、帰国14ヶ月後のインタビューにおいては、被験者は丁寧体と普通体の混用よりは、むしろ丁寧な話し方に変っていた。その原因は、オーストラリアでは日本のホスト家族のような話し方をする人がいないことと現在の高校における日本語の先生による訂正にある。

Marriott(1995)は、一年間の中高生交換プログラムに参加したオーストラリア人学習者を対象に、来日前と帰国後の縦断的研究を行った。留学前には、学習者全員において丁寧体が優勢であったが、帰国後は8名のうち、5名において普通体が優勢になっていたという結果を得た。分析結果から、学習者が丁寧体と普通体を混用して使用する殆どの場合が無意識的であり、日本語母語話者の規範で切り替える能力はまだ習得できていないと述べている。

申(2005)では、日本語母語場面、韓国語母語場面及び、日本語母語話者と韓国語母語話者の接触場面の3つの会話場面において、同じ会話相手にそれぞれ3回の調査を行った。その結果、初対面の段階である一回目の調査ではどの場面においても丁

寧体の使用率が高かった。しかし、日本語場面では2回目から基本話体が普通体に変わっているが、韓国語場面では3回目になっても丁寧体が優勢であった。韓国語母語話者には韓国語に同様の言語形式が存在するため話体の使い分けが当然であり、顔合わせ回数が増えても韓国語では普通体移行への両者間の合意がない限りスタイルシフトは行われないと説明されている。一方、接触場面においては母語話者も学習者も2回目以降において丁寧体と普通体の使用率が逆転していた。

以上、オーストラリア人学習者、日本語母語話者と韓国人学習者の話体の縦断研究を挙げたが、マレーシア人学習者がどのように話体を使い分けしているかの研究は殆どない。また、丁寧体が求められる初対面の場面において、一定の仕組み(メカニズム)で縦断的に研究されたものはない。そこで、筆者は日本留学の学部生マレーシア人を対象にし、来日前と来日後における同条件の会話をデータとし、「会話間の時間軸」¹及び、「会話内の時間軸」²のマクロなレベルにおける話体の使い分けの変化について考察した。

3 研究方法

3.1 被験者と手順

本稿では日本語母語話者と日本語学習者の接触場面の会話を研究の対象とした。日本語学習者はマレー語を母語とするマレー系のマレーシア人日本語学習者(以下学習者とする)、³ 男性3名(MM1、MM2、MM3)と女性3名(MF1、MF2、MF3)、計6名の学部生である。録音開始時、学習者の年齢はいずれも20歳前後であり、2002年の3月25日に来日している。全員が来日の前にマレーシアで一年間半日本語予備教育を受けていた。

枠組みとしては、Brown and Levinson (1987) の Politeness Theory における Linguistics

¹ 本稿における「会話間の時間軸」とは、来日1ヶ月前、来日4ヵ月後、来日11ヶ月後の縦断的な時間の区切りである。

² 本稿における「会話内の時間軸」とは、各15分間の会話を3分単位の時間の区切りである。

³ マレーシアは、マレー系、中国系、インド系、先住民などからなる多民族国家であり、国語はマレー語であるが、英語も公用語となっている。しかし、各民族、話す言葉も異なり、マレー語、中国語、タミール語など、それぞれ民族の母語を持っている。

Jamila Mohd

Politeness にある次の3つ要素を、全て初対面の相手との会話に限定して調査することにした。

- 1) 話し手と聞き手の社会的距離「D (social Distance)」(初対面の相手であること)
- 2) 聞き手の話し手に対する力「P (relative Power)」(相手が年上、かつ大学院生であること)
- 3) 相手にかかる負担の度合「R (absolute Ranking of impositions)」(同様な場面で同様の話題について話すこと)

学習者に丁寧体を使わせることを意図した設定であるため、対話の相手は初対面で年上(26歳～30歳)の日本語母語話者女性3名(JF1、JF2、JF3)である。録音する際、両者に自由に会話をするように提示した。6名の学習者と JF に二人一組で、各15分間日本語での自由会話をしてもらった。調査は来日1ヶ月前(2002年2月)、来日4ヶ月後(2002年7月)、来日11ヶ月後(2003年2月)の、計3回行った。計270分間の録音資料を文字化し、発話末表現について分析した。

3.2 発話末における話体の分類

当該発話において情報伝達が終了していると判断された発話、つまり言い終わっている発話のみを分析対象とした。言い終わっている発話には、従来の「丁寧体」と「普通体」と呼ばれる話体がある。さらに、言い終わっている発話の中には、文法的に、あるいは音声的に、または文法的にも音声的にも、言い切っていないと判断される発話がある。本稿ではこのような発話を「中途終了型発話」(宇佐美 1995)と見なす。本稿では、中途終了は発話末の表現として数えるが、分析対象としない。

- ①「丁寧体」: {です/でした/でしょう}、{ます/ました/ましょう/ません/ませんでした}、{ください}などで終わる発話、丁寧体+終助詞及び接続詞。
- ②「普通体」: {だ/だった/だろう}、形容詞、形容動詞、名詞、動詞の普通体で終わる発話、普通体+終助詞及び接続詞。
- ③「中途終了型発話」: {寒くて/本当に/ちょっと}などで言い終わっている発話の中で、文法的に、あるいは音声的に、または文法的にも音声的にも、言い切っていない発話。

本稿では、「はい」、「うん」、「いいえ」などの応答詞だけの発話を分析の対象から除

外する。なお、「そうですか」「そうですね」「そうか/そっか」「そうね」「そうそう」のような相づち的な発話は丁寧体あるいは、普通体の形式に分類でき、これらの相づちで丁寧さが左右される可能性もあるため考察の対象にする。会話資料に現れた全ての発話末表現を「丁寧体」、「普通体」、「中途終了型発話」、の3つに分類し、分析した。

4 結果と考察

4.1 「会話間の時間軸」における話体の使い分けの変化

採録した資料の結果、学習者は発話末の話体を丁寧体か普通体のどちらかに決め、それを一貫して使用している会話はどの会話においても全く見られなかった。つまり、頻度は異なるものの、どの会話においても学習者全員が丁寧体と普通体を混用していた。学習者とJFの会話における丁寧体と普通体及び、中途終了型発話の全体に対する割合を、来日1ヶ月前は表1、来日4ヶ月後は表2、来日11ヶ月後は表3で示した。

4.1.1 来日1ヶ月前

表1: 来日1ヶ月前における話体の使用頻度

会話1		丁寧体	普通体	中途終了型発話	総発話数
会話1.1	MM1	60	12	15	87
	JF1	158	9	7	174
会話1.2	MM2	66	16	34	116
	JF1	159	17	19	195
会話1.3	MM3	78	11	26	115
	JF1	154	13	16	183
会話1.4	MF1	56	32	13	101
	JF1	146	10	17	173
会話1.5	MF2	28	7	18	53
	JF1	101	6	14	121
会話1.6	MF3	63	8	16	87
	JF1	127	12	4	143

まず、来日1ヶ月前においては、学習者の使用頻度が異なるものの、全員丁寧体が高い使用率を示しており、会話の「基本話体」⁴が丁寧体であることがわかる。学習者全員において、動詞や名詞、形容詞などに丁寧体が多く見られた。中でも、JF1に対して質問をする際、及び否定形の場合は全て丁寧体が使用されていた。一方、普通体の殆どは、単に「です」が付いていないだけの形式⁵である。日本語能力不足や会話の流れ

⁴ 会話において丁寧体と普通体のうち、最も多く現れる話体を「基本話体」と見なす。

⁵ 例えば、「寒い」「学生」「きれい」などの形式は「です」をつければ丁寧体になるため、この形式に相当する。また、否定形には丁寧体の「～ません」と「～ないです」形式、及び普通体「～ない」形式は

への依存などの理由で、中途終了型発話が多く、MF1を除いて、学習者の丁寧体ではない発話末としては、普通体よりも中途終了型発話が多いことが観察された。

4.1.2 来日4ヶ月後

表2: 来日4ヶ月後における発話末の使用頻度

会話2		丁寧体		普通体		中途終了型発話		総発話数
会話2.1	MM1	4	7%	51	85%	5	8%	60
	JF2	68	67%	17	17%	16	16%	101
会話2.2	MM2	40	45%	28	32%	20	23%	88
	JF2	69	62%	20	18%	23	20%	112
会話2.3	MM3	70	58%	35	29%	16	13%	121
	JF2	91	67%	22	16%	23	17%	136
会話2.4	MF1	30	42%	23	32%	19	26%	72
	JF2	63	59%	27	25%	17	16%	107
会話2.5	MF2	13	29%	21	47%	11	24%	45
	JF2	56	75%	7	9%	12	16%	75
会話2.6	MF3	41	67%	13	21%	7	11%	61
	JF2	82	72%	23	20%	9	8%	114

来日4ヶ月後からは、学習者全員において丁寧体の使用率が減少しており、学習者6名のうち、丁寧体を基本話体とする者は4名(MM2、MM3、MF1、MF3)に減っていた。つまり、2名(MM1とMF2)の基本話体が普通体に変化していた。また、来日1ヶ月前とは逆に、学習者全員において普通体が中途終了型発話より多く観察された。MM1の場合、普通体の多用により、丁寧体が中途終了型発話よりも少なくなっていた。丁寧体の使用は、自己紹介部、動詞の一部「違います、食べました、知っています、(MF3:あります)、助動詞「でしょ(う)」、JF2に対する質問、「そうですね、そうですね」の相づちに見られる。一方、普通体は、単に「です」が付いていないだけの形式、否定形、動詞の一部「ある、いる、なる、(MM1:違う、作る)」に見られる。

4.1.3 来日11ヶ月後

表3: 来日11ヶ月後における発話末の使用頻度

会話3		丁寧体		普通体		中途終了型発話		総発話数
会話3.1	MM1	4	5%	62	73%	19	22%	85
	JF3	67	37%	94	52%	21	11%	182
会話3.2	MM2	37	33%	56	49%	20	18%	113
	JF3	70	40%	81	46%	24	14%	175
会話3.3	MM3	82	55%	33	22%	33	22%	148
	JF3	52	31%	88	52%	28	17%	168
会話3.4	MF1	35	36%	38	40%	23	24%	96
	JF3	69	50%	50	36%	18	13%	137
会話3.5	MF2	6	6%	64	69%	23	25%	93
	JF3	47	28%	95	58%	23	14%	165
会話3.6	MF3	45	52%	21	24%	20	23%	86
	JF3	56	36%	79	51%	19	12%	154

あるが、「～ない」形式は「です」をつければ丁寧体になるためこれに相当する。

来日11ヶ月後においては、来日4ヶ月後よりも、学習者全員の丁寧体の使用率がさらに減少している。学習者6名のうち、丁寧体を基本話体とする者は2名(MM3とMF3)に減っており、また他の4名(MM1、MM2、MF1、MF2)の基本話体も普通体となっていた。学習者の日本滞在期間が長くなるにつれて、初対面で年上の相手に対して、丁寧体の使用が減少し、普通体の使用が増加していることがわかる。丁寧体の使用は、自己紹介部(MM1とMF2除き)、動詞の一部「違います、食べました、知ってます、(MM3:思います)、(MF3:買います、知ってます)」、助動詞「でしょ(う)」、JF3に対する質問、「そうですか、そうですね」の相づちに見られる。一方、普通体の使用は、単に「です」が付いていないだけの形式、否定形、動詞の一部「ある、いる、なる、できる、忘れる、(MM1:買う、売る)」、縮約形「(MM2:残っちゃう、MM3:使っちゃう、MF2:困っちゃう)」、「そうか、そうそう」などの相づちに見られる。

4.2 「会話内の時間軸」における話体の使い分けの変化

今回会話資料としてとり上げたどの会話においても、共通の流れとして、自己紹介から、学校、専門、勉学、将来の夢、日本での生活、趣味、好きな食べ物、スポーツなどについて、表面的な話題で新しい情報を交換する内容となり、親密な話題や共通経験に基づく話題は殆ど現れず、深い話までは進まなかった。このような、初対面の相手が年上であり、さらに時間的に制約されているという、心的距離(D)と力関係(P)がはっきりと設定された会話では、年下である学習者の基本話体が丁寧体になるのが自然であると想定されるのであるが、日本滞在が長くなるにつれて基本話体が普通体に変わっている学習者が増えていることが判明した。

会話内において適切であると思われる丁寧体が、どのように変化するか⁶を見てみよう。また、母語話者の丁寧体の現われ方も同時に観察する。⁷そこで、マクロなレベルでのシフトの流れを観察するため、15分間の会話を3分単位で時間を区切り、各学習者と母語話者の丁寧体と普通体のうち、丁寧体の使用状況のみを見た。その結果を、来日1ヶ月前において図1の会話1.1～会話1.6、来日4ヶ月後において図2の会話2.1～会話2.6、来日11ヶ月後において図3の会話3.1～会話3.6のグラフに示した。

⁶ 初対面の会話でも、特に、若い同年代の話者同士の会話などでは、会話の最初のうちは敬体(丁寧体)が多かったのが、時間が経って互いに打ち解けていくにつれ、常体(普通体)の割合が増えていくということも十分考えられる(宇佐美 2000)。

⁷ 本稿では、学習者の話体の使用のみを分析し、母語話者を分析対象としない。

4.2.1 来日1ヶ月前

まず、来日1ヶ月前における丁寧体の使用比率を見てみよう。図1の会話1.1～会話1.6のグラフから学習者の丁寧体の出現推移を表す曲線は次の2つの使用パターンに分類⁸できる。

①「高位置横這い型」

「会話1.1 (MM1)、会話1.2 (MM2)、会話1.3 (MM3)、会話1.5 (MF2)、会話1.6 (MF3)」

高位置横這い型とは、「会話開始部から丁寧体の使用が5割以上あり、その後も高い丁寧体の使用率が続いているパターン」である。5名の学習者は、使用頻度が異なるものの、会話開始部から終結部まで丁寧体を多く使用している。この段階では、初対面で年上の相手に対して、適切な話体を選択していると言える。マレーシアでの日本語予備教育機関においては、日本語の会話の話体として丁寧体のみインプットされており、普通体は動詞などの活用形として学習したのみで、会話の話体としての意識がまだ薄いため、丁寧体の話体しか使用できなかったと解釈することもできる。

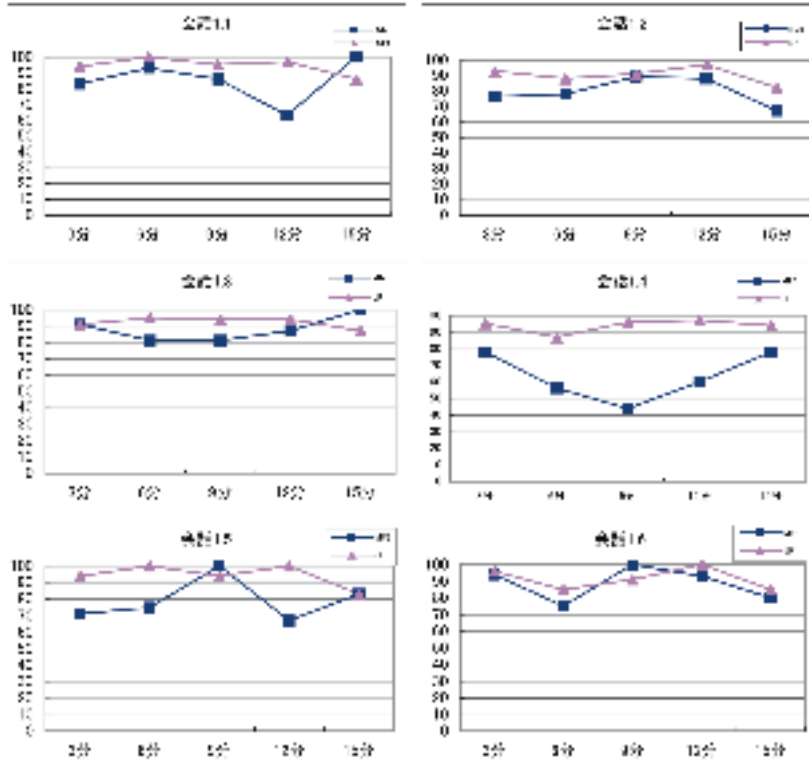
②「変動型」

「会話1.4 (MF1)」

変動型とは、「下降や上昇を伴うため、一定の傾向が見られないパターン」である。MF1の会話の流れの中で、3分から9分の間は、日本の大学と専門の希望、将来、家族、予備教育の日本語の授業についてであり、形容詞と名詞句の発話が多く使われているが、「です」が付いていないため、丁寧体の使用が減少していた。9分から15分の間は、日本の食べ物とマレーシアの食べ物についての話題であるが、動詞を多く使用し、その殆どが丁寧体であるため、丁寧体の使用率が再び増加している。

⁸ 分類の用語は伊集院(2004)における母語話者と上級レベル学習者のスピーチスタイルシフトの特徴を参考に、一部書き加えたものである。

図1: 来日1ヶ月前の会話内の時間軸における丁寧体の使用



4.2.2 来日4ヶ月後

次に、来日4ヶ月後における丁寧体の使用比率を見てみよう。図2の会話2.1～会話2.6のグラフから、学習者の丁寧体の出現推移を表す曲線は次の3つの使用パターンに分類できる。

①「高位置横這い型」

「会話2.3(MM3)、会話2.4(MF1)、会話2.6(MF3)」

学習者により使用頻度が異なるものの、丁寧体を多く使用していることに変わりはない。

②「変動型」

「会話2.2(MM2)、会話2.5(MF2)」

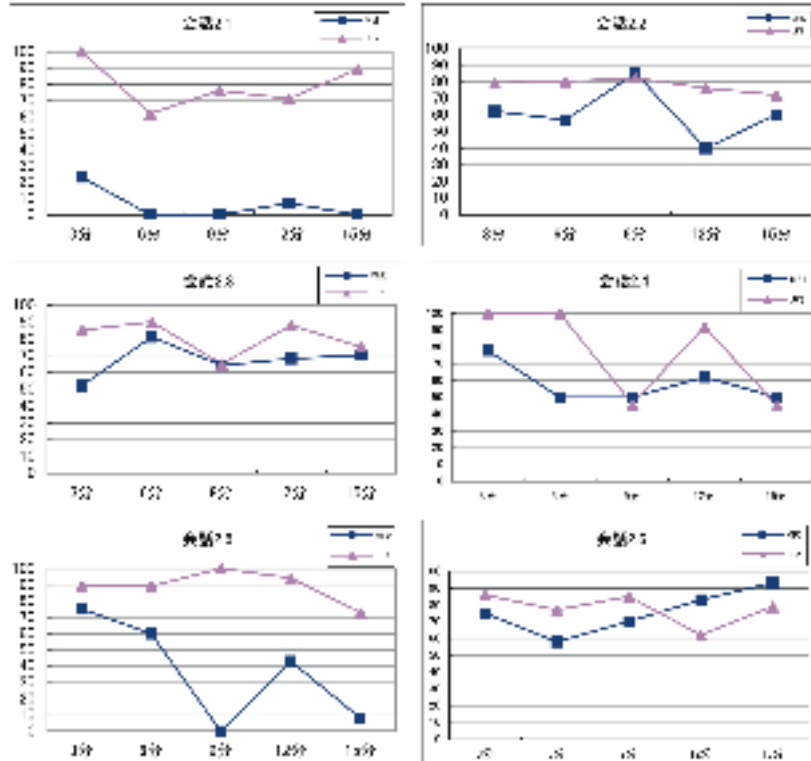
MM2の場合は、6分～9分の間では、日本での友達の話題に変わり、MM2は、「はい、そうです。」「まだです。」「好きです。」「違います。」などと短く答え、丁寧体の使用率がよく一層上がっていたが、9分～12分の間では、形容詞と名詞句の発話を多く使っているが、「です」が付いていないため、丁寧体の使用が減少していた。会話2.5の6分～9分の間で、MF2の丁寧体が0となっているが、これは、普通体を2度しか使用せず、丁寧体の使用は全くなかった。つまり、発話そのものが極端に少ないからである。

③「低位置横這い型」

「会話2.1(MM1)」

低位置横這い型とは、「会話開始部から丁寧体の使用が2割程度であり、その後も丁寧体の使用率が低いパターン」である。本稿の学習者の中で最も著しい変化が見られたのは MM1である。この開始部の段階で既に丁寧体の使用が減少しており、普通体の使用が急増していた。開始部の自己紹介では少し丁寧体を使用されたものの、その後は殆ど出現しなかった。これは、丁寧体での自己紹介がフレーズ化して定着しており、その自己紹介部が終了した途端に MM1の基本話体である普通体になったと考えられる。

図2: 来日4ヶ月後の会話内の時間軸における丁寧体の使用



4.2.3 来日11ヶ月後

続いて、来日11ヶ月後における丁寧体の使用比率を見てみよう。図3の会話3.1から会話3.6のグラフから、学習者の丁寧体の出現推移を表す曲線は次の4つの使用パターンに分類できると考えられる。

①「高位置横這い型」

「会話3.3(MM3)、会話3.6(MF3)」

MM3は、丁寧体の使用が多かったり(6分目、12分目)、少なかったり(3分目、9分目、15分目)と一定ではなかったが、50%以上の使用率であることに変わりはない。MF3は、一貫して丁寧体を使用していた。MM3と MF3は「そうですか」、「そうですね」のような丁寧

Jamila Mohd

寧体の相づちを使用していた。ただ、MM3は否定形に「～ないっす」という音韻的省略を併せた発話末形式を使用し始めている。これは環境から自然に身に付いたものであると考えられる。

②「変動型」

「会話3.2(MM2)、」

MM2は、丁寧体の使用が多かったり少なかったりと一定ではなかった。3分～6分の間は、日本の大学の専門や授業についての話題であり、丁寧体が多く使用されていたが、6分～12分の間においては、日本語の先生、趣味のコンピューターゲーム、試験、一時帰国についての話題であり、普通体の方が多く使用されていた。これは話題の盛り上がりによる丁寧体に対する注意力の散漫が原因であるとも考えられる。

③「低位置横這い型」

「会話3.1(MM1)、会話3.5(MF2)」

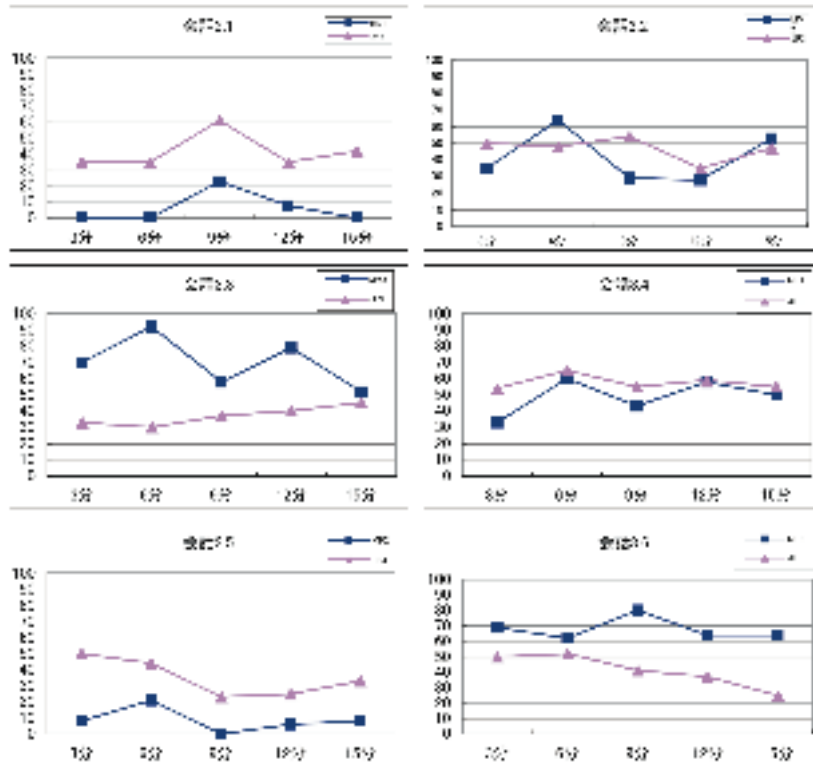
MM1は、会話の開始部の自己紹介ですら普通体を使用するようになっている。その後、9分目に丁寧体の使用率が少し上がったが、再び低い使用率が続くようになった。MF2も同様、6分目に丁寧体の使用頻度が少し上がったが、その後は殆ど普通体を使用していた。

④「中位置横這い型」

「会話3.4(MF1)」

中位置横這い型とは、会話開始部から終結部までの丁寧体の使用率が2割から5割の間を推移しているパターンである。MF1は、環境から身に付いた「そうそうそう」、「そっか」のような相づち、「～ちゃう」のような縮約形、など、全体的に普通体の方を多く使用しているが、「行きます」「思います」「なります」「～します」、の特定の動詞の場合は丁寧体を用いている。

図3: 来日11ヶ月後の会話内の時間軸における丁寧体の使用



マクロなレベルでのシフトの流れにおいて各学習者と母語話者の丁寧体の使用状況を見たところ、来日1ヶ月前において2つの特徴が見られる。しかし、来日4ヶ月後においては3つ、そして、来日11ヶ月後においては4つの特徴が観察され、来日後バリエーションが増えていることがわかる。これは、日本語の会話の話体としては丁寧体のみがインプットされてあった来日前の環境と異なり、来日後は、普通体が会話の中に現れやすい学部での留学環境に変わり、普通体のインプットが多くなるため、次第に2つの話体を身に付けはするものの、使いこなせないという習得状況にあると考えられる。また、その使用にも個人差が見られるため、学習者の話体選択には学習者独自の間言的規範とでもいべきものが反映されていると考えられる。

4.3 話体の使用傾向・選択要因

来日前及び、来日後の会話における、学習者の話体のシフトが不規則であるため、その使用機能までは特定できなかったが、話体の使用傾向・選択要因に関しては観察できた。

4.3.1 来日1ヶ月前

来日1ヶ月前においては、学習者全員に、自己紹介部、動詞や名詞、形容詞などに丁寧体が多く見られた。否定形では表4のように、全ての発話で丁寧体が使用されていた。JF1の丁寧体の質問に対して、学習者はその丁寧体に合わせて返事することも多かった。一方、普通体の殆どは、単に「です」が付いていないだけの形式であった。普通体を最も多く使用していたMF1の会話を取り上げて、これらの特徴を示す(例1)。

例1(会話1.4)

⇒ MF1: 上にマヨネーズとか、サーモンとか、のある寿司が大好き。

JF1: う〜ん、わさびは食べたことがありますか?

MF1: あります。

JF1: う〜ん、どうですか?

⇒ MF1: う〜ん(笑)辛い。

JF1: (笑)辛い。

⇒ MF1: はい、うんちよつと苦い。

JF1: あ、苦いですか。じゃ、海苔は好きですか?

MF1: う〜ん、あんまり、あまり好きではありません。

4.3.2 来日4ヶ月後

来日4ヶ月後の場合は、学習者により丁寧体と普通体の使用率が異なっている。すなわち、個人差が大きい。MM1は丁寧体を使用しなくなり、普通体中心で会話をするようになっていた。MF2は丁寧体より普通体の方を多く使用している。また、MF2とMF3以外は、学習者によって使用頻度は異なるものの、表4で示すように、普通体の否定形使用率が上昇していた。例2を参照されたい。

例2(会話2.3)

JF2: 勉強は好きですか。

MM3: うへん、勉強はあまり好きじゃない。仕方がない。

来日4ヶ月後における丁寧体の使用は、自己紹介部、助動詞「でしょ(う)」を使用する際、及び、JF2に対して質問をする際に使用される傾向が学習者全体に共通して、という傾向が見られた。また、MM3、MF1、MF2、MF3は JF2の発話に対して、「そうですか」や「そうですね」などの相づちを打ち始めていた。一方、学習者全体に共通して表れる普通体の形式は、単に「です」が付いてないだけのものが圧倒的に多かった。これは特に、形容詞と否定形に頻繁に見られた。この形式に「です」を付ける意識が学習者に存在していれば、それぞれの話体の使用状態は大きく変わるはずである。それ以外にも、特定の動詞(例えば「ある、行った」)の普通体が徐々に増えており、例3のように相応しくないところに普通体が使われた発話が多く観察された。

例3(会話2.1)

JF2: 日本の生活でね、あのなんか困ったとかそういうことはないですか。え、全然なんか習慣が違うとかそういうのってありますか?

MM1: 来たばかりの時、よくある。今はない。

4.3.3 来日11ヶ月後

学習者により使用頻度は異なるものの、全体として普通体を多く使用することが明らかとなった。この段階にも普通体としては、例4のように、単に「です」が付いてないだけの形式が圧倒的に多いことがわかった。これは特に、形容詞と否定形に頻繁に使用されていた。この形式に「です」を付ける意識が学習者に存在していれば、それぞれの話体の使用状況は大きく変わるはずである。

例4(会話3.2)

MM2: コンピュータと遊ぶこと、遊ぶのは好き。プログラミングのことあまり…

JF3: そっか、でも工学部は、他にどんなことやってるんですか。プログラミングの他に…

MM2: 数学。

JF3: 数学、へえ、得意ですか。

MM2: 苦手。

上述のこととの関連で、相応しくないところに普通体が使われている例が多く観察さ

Jamila Mohd

れた。例5に見られるように、MF2は会話の開始の段階からすでに普通体を使用し始めている。

例5(会話3.5)

JF3: こんにちは。

MF2: こんにちは。

JF3: はじめまして。

MF2: はじめまして。

JF3: 寒かったですね。

MF2: 寒い。

MM1とMM3以外の学習者は、「そうそう」「そうか」のような相づちを使用している。また、表4で示すように普通体の否定形使用率がさらに上昇していた。

一方、普通体を多く使用中、JF3に直接質問する際には、例3のように殆どの場合に丁寧体を用いている。これは、学習者が聞き手を強く意識した時に丁寧体が選択されることを意味している。

例6(会話3.6)

MF3: もし宿題がなかったら、たぶん、ああボーリングする。

JF3: あ、ボーリング? ええ、名工大だと…

MF3: ブランスイック。知ってますか。

来日11ヶ月後の学習者の場合、丁寧体と普通体の使用に大きな個人差が見られる。話体の使い分けに関する明確な意識が確立している学習者と確立していない学習者があると判断してよいであろう。

なお、本節で考察した否定形の使用状況については、次の表4のようにまとめることができる。

表4: 否定形の話体の使用傾向

否定形	来日1ヶ月前	来日4ヶ月後	来日11ヶ月後
「～ません/～ませんでした」	43 91%	8 16%	5 12%
「～ないです/～なかったです」	4 9%	14 28%	6 15%
「～ない/～なかった」	0 0	28 56%	30 73%
合計	47	50	41

学習者の丁寧体と普通体の使用傾向には、1) 社会的・文化的要因、2) 言語的・談話

的要因、3) 心理的要因という3つの要因が考えられる。

1) 社会言語学的要因

- ① 話体に関する意識の有無があげられる。来日後の調査でも、話体の使用パターンが様々であることがわかる。6名の学習者のうち、MM3と MF3以外は、初対面で年上の相手に対して、丁寧体を基本とした会話をしなければならないという意識が欠けているようにみえる。相手や場面により話体を使い分けを知らず、環境による言語のインプットからその時々で自然に身に付いた話し方を使用する傾向がみられる。
- ② 会話において普通体が多発しても、会話相手の母語話者からヒントや言い直しなどの訂正が殆ど行われないため、気が付きが起きることなく、普通体が使用される状況が続いている。

2) 言語的・談話的要因

- ① 形容詞、形容動詞、名詞句、否定形の場合、「です」が付いていないだけの形式を普通体として多く使用していることが学習者全員に共通している。丁寧体として、「～ません」形を多く使用する学習者が、普通体として「～ない」形を使うということは想定しにくい。「～ないです」という表現を通常使用している場合において、「です」の脱落が起こりやすいと考えられるからである。
- ② 接触場面では、母語話者が会話の主導権を握る。話題の提示をしたり、説明を要求するような、はたらきかけが JF から学習者に対して行われる。その結果、学習者側には、応答や説明の発話が必然的に多くなり、応答として短い発話が多く、普通体になりやすい。

3) 心理的要因

- ① JF に問いかける際、丁寧体を使用していることから判断して、学習者が聞き手を強く意識した時には丁寧体を選択するという心理が考えられる。
- ② 学習者の多くは、普通体で会話することこそが、より自然な日本語が習得できた結果であり、相手に自己をアピールすることができると考えているようである。

6 おわりに

本稿では、来日1ヶ月前、来日4ヶ月後、来日11ヶ月後の、計3回の調査から、マレー語母語話者が初対面で年上の相手に対して日本語の話体をどのように使い分けるかに

ついて分析した。その結果、来日前においては丁寧体が多く使用されていた。来日後においては、学習者により頻度がことなるものの、普通体の使用が段々増加していることが明らかとなった。一方、学習者の日本語能力には個人差が見られ、話体の不適切な使用も多く観察された。

今回の資料から、学習者による話体の使い分けに関して、「会話間の時間軸」における使用傾向及び、「会話内の時間軸」における使用パターンが見られた。その選択要因もある程度想定できた。学習者の話体選択には学習者独自の中間言語的規範とでもいうべきものの存在が考えられ、日本に滞在しているにも関わらず、母語話者の持つ社会的規範が習得されているとは言い難いのが現状である。よって、適切な使い分けができず、対人関係の構築に支障をきたすことが多い。本稿で取り上げた話体の問題は、マレー語を母語とする学習者が日本語という言語に含まれる文化をどう理解するかといった異文化理解の問題の一例であるともいえる。今後の課題として、同条件下における同学習者を引き続き観察し、滞在期間がさらに長くなった場合に話体の使い分けがどう変化していくかを調査すること、必要に応じて話体に関する正しい指導をし、その指導後の効果について考察することなどがあげられる。

参考文献

- 生田少子・井出洋子(1983)「社会言語学における談話研究」『月刊言語』12巻12号 大修書店 pp. 77-84
- 伊集院郁子(2004)「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け—母語場面と接触場面の相違—」『社会言語科学』社会言語科学学会 第6巻第2号 pp.12-26
- 宇佐美まゆみ(1995)「談話レベルから見た敬語使用:スピーチレベルシフト生起の条件と機能」『学』第662号 昭和女子大学近代文化研究所 pp. 27-42
- 菊池康人(1997)『敬語』講談社学術文庫
- 三井豊子(2000)「在日日系ブラジル人に見られる日本語運用から—常体と敬体の使い分け—」第7回国立国語研究所国際シンポジウム第1専門部会 国立国語研究所 pp. 39-51
- 三牧陽子(1993)「談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」『大阪教育大学紀要 第1部門 人文科学』第42巻第1号 大阪教育大学

- ネウストブニー(1995)「外国人とのコミュニケーションと日本語教育」『新しい日本語教育のために』大修館書店
- メイナード・K・泉子(1993)『会話分析』くろしお出版
- メイナード・K・泉子(2004)『談話言語学』くろしお出版
- 申媛善(2005) 「韓国人日本語学習者のスピーチスタイルシフトの習得——時間軸に沿ったスタイルの変化に着目して——」日本語教育学会秋季大会予稿集 pp. 127-132
- Brown, P. and Levinson, S.(1987)*Politeness : Some universals in language usage*, Cambridge University Press
- Canale, M. and Swain, M (1980) “Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing”, *Applied linguistics* 1(1) pp. 3-47
- Hashimoto,H.(1993) “Language acquisition of an exchange student within the home-stay environment”, *Journal of Asian Pacific Communication* pp. 209-224
- Marriott, H.E. (1995) “The Acquisition of Politeness Patterns by Exchange Students in Japan”, *Second Language Acquisition in a Study Abroad Context* John Benjamin Publishing Company pp. 197-223
- Usami Mayumi(2002) *Discourse Politeness in Japanese Conversation: Some Implications for a Universal Theory of Politeness* ひつじ書房

